

外国人児童生徒教育推進協議会報告

国際学部教授 田巻 松雄

今年度も外国人児童生徒教育推進協議会を2回（1回目2019年9月18日、2回目2020年1月14日）開催することが出来た。栃木県教育委員会と県内9市1町（那須塩原・大田原・宇都宮・鹿沼・小山・栃木・真岡・佐野・足利市と壬生町）の教育委員会及び小中学校の代表校長に参加いただいている会議である。今年度で10年目を迎えた。全県的な視点で外国人児童生徒教育問題の現状や課題について情報・意見交換してきた。

1 回目：主に進路状況調査報告

1回目の会議では、9回目の外国人生徒の進路状況調査の結果について報告した。栃木県内のすべての公立中学校を対象に、外国人生徒（外国籍生徒と中学3年時に日本語指導が必要と判断されていた日本人生徒）の進路状況を把握するための調査である。

今回の調査では、151人の生徒の進路状況が確認出来た。高校進学者は135人で、回答者総数151人の89.4%を占めた。専修（専門）学校進学者が4人いた。進学先別の進学者が全体の人数151人に占める割合は、公立全日制89人（58.9%）、私立全日制32人（21.2%）、公立定時制5人（3.3%）、公立フレックス制6人（4.0%）、専修（専門）学校4人（2.6%）、公立・私立通信制3人（2.0%）であった。

今回の調査で日本での就学期間が3年以内であり、特別措置受験資格を有していたと明確に理解される生徒は151人中19人（12.6%）であり、そのうちの5人（3.3%）が特別措置を使って受験した。3人（日本語指導「有」2人、日本語指導「無」1人）はA選抜を受験し、3人とも公立全日制に合格した。その他の日本語指導「有」2人はB選抜を受験し、1人は公立全日制に合格した。1人は特別措置受験では不合格となり、公立定時制を受験して合格した。今回の調査対象者151人のうち日本語指導「有」は27人で、そのうち公立全日制進学者は8人であったが、そのうち3人が特別措置を利用して進学している。

情報・意見交換では、高校入試に関するものが多かった。日本での就学期間が3年を超える生徒は特別措置での受験は出来ない。日本語を母語としない生徒、とく日本語指導が必要と判断される生徒が一般入試の学力試験を受けて合格することが難しいことは言うまでもない。漢字の多い問題文を理解することが困難な生徒を抱えている学校からは、入試の問題文にルビ（ひらがな）をふってもらえると大変助かるという意見が出された。この意見はとても印象に残った。個人的に、外国人生徒への進路保障や配慮では、特別定員枠に目を向けがちであったからだ。この意見を聞いて、全国的には高校入試問

題にルビをふっている地域は結構あったはずだ
と思い、ルビふりの現状について確認してみよ
うと思った。

2 回目：主に「高校入試問題文にルビをふるこ とを要望する」

2 回目の会議では、高校入試問題文におけるル
ビふりを主要なテーマとしようと考えた。いく
つかの角度から、ルビふりの重要性を確認した
からである。

文部科学省は、2019 年 6 月 17 に公表した「外
国人の受入れ・共生のための教育推進検討チ
ーム報告～日本人と外国人が共に生きる社会に向
けたアクション～」の【中学生・高校生の進学・
キャリア支援の充実等】において、「公立高等学
校入試における帰国・外国人生徒等への特別な
配慮（ルビ、辞書の持ち込み、特別入学枠の設
置等）について、地域の実情に応じて充実が図
られるように促す」と報告している。

高校入試問題文におけるルビふりの現状につ
いては、3 年生のゼミ生と一緒に調べた。その結
果、少なくとも 17 都府県（「個別の事情、必要
に応じて配慮する」3 県を含む）が問題文にひら
がなのルビをふっていることが分かった。また、
東京都は、2019 年度入試から、「在日期间が 3 年
以内の外国籍生徒」に限定していたルビふりの
対象者を「国籍を問わず、日本語指導を必要と
する生徒で入国後の在日期间が原則 6 年以内ま
での生徒」に拡大している。ルビふりは、高校
入試における外国人生徒への重要な配慮として
全国的に広がりを見せている。

外国人生徒への学習支援の場でも、漢字の多
い問題文の理解が困難な生徒が少なくないこと

が確認されている。昨年 10 月から小山市が主催
する「外国につながる子どもの学習支援『学び
の教室』」に数回学生と一緒に参加した。土曜日
の午前中に開催されている教室で、主に高校受
験を控えている生徒が市内数か所の中学校から
集まってくる。参加した学生からの感想では、
時々「問題文理解の困難さ」が登場する。

- ・ 証明自体も難しかったが、彼女らが一番苦戦し
ていたのは問題文を読むことだった。証明問題
には、「弧」、「弦」、「角」、「円周」などとい
った漢字が多く使われており、誤って認識して
しまうと解を導くことは極めて困難である。漢字
の読み方がわからないため、問題の意図を理解
することが難しいということを実感した瞬間
だった。
- ・ 相似な図形の単元を学習した。「最初からわか
らないからワークが解けない」。
- ・ （日本語、英語での会話が困難だったため）、母
語を聞いたところ偶然にも同じだったため、母
語で話したところ、「問題文が読めない、方程
式の意味が分からない、例文だけでは解けない
と」いうことで、一つ一つ訳しながら進んだ。

高校入試問題文におけるルビふりの重要性を
確信し、栃木県でも実現できるように、栃木県
教育委員会への要望書案を作成し、会議で提案
した。参加者からはおおむね賛同の声が聞かれ
た。どのような生徒を対象とするのかに関する
条件整備も含め、検討する課題はいろいろある
が、今回の協議会での話し合いを踏まえ、栃木
県でもルビふりが実現できるように是非働きか
けたいと思っている。